

ジョルジュ・デュヴォー著

『ユトーピアの社会学』

Georges Duveau : Sociologie de l'utopie et autres

《essais》, ouvrage posthume, Introduction d'André

Canivez

Presses Universitaires de France, Paris, 1961.

pp. xv+193

藤 本 治

ユトーピア研究は、欧米の社会学におけるじみではあるが無視しえぬ一つの潮流を形成してきているように思われる。この潮流は、わが国にまで及んできたようである。雑誌「思想の科学」が一九六二年六月に「ユトーピアをさがそう」という特集号を出したのはそのあらわれであろう。だが、この場合は、伊豆のある漁村の漁業組合や「夫婦生活」のなかにユトーピアを探しに出かけたあげく、いささかこっけいな空騒ぎに終わってしまったようである。われわれとしては、ユトーピアはやはりヨーロッパ人のつくりだした思想的産物だということを知らされたわけである。

(131) 書 評
ここでとりあげるジョルジュ・デュヴォーの『ユトーピアの社会学』も、一九五〇年以降の、ユトーピア学の形成をめざす

社会学の潮流に棹さしたものである。本書はしかし、体系的な構成をもったものではなく、むしろ論文集である。著者が一九五八年、五六歳で亡くなったことが体系化の意図を挫折させてしまったのである。本書は、著者が一九五〇年から一九五八年まで、Cahiers internationaux de sociologie その他の雑誌に寄稿した論文九篇と未発表の論稿二篇とを、著者の死後編集し、アンドレ・カニヴェースの序文を附して発行されたものである。したがって、これは未完に終わった体系ではあるが、しかし著者の問題関心や方法は、本書によって充分にうかがうことができる。

その構成はつぎのとおりである。

第一部 ユトーピアの社会学

第一章 ユトーピアの社会学序説 第二章 ユトーピアと

社会計画 第三章 ユトーピア復興 第四章 テクノクラシ

ィは人間的自由を脅やかすか

第二部 ユトーピアの心理学

第一章 ユトーピアの父、トマス・モア 第二章 ユトー

ピストは生の熱気を欠いているか 第三章 ユトーピストの

内的矛盾 第四章 性格学から見たユトーピスト

第三部 ユトーピアと歴史

第一章 歴史における人間的動機 第二章 歴史的行為に

おける歴史の重み 第三章 ヨーロッパと社会主義

第四部 断章

青年時代に作家たらんとしたといわれるだけあって、著者の

文体は多彩な輝きをもち、人の意表をつく形容辞が駆使されておりレトリックは難解である。短い書評のなかでこの文章の妙味を紹介することは不可能であって、骨組みだけを紹介してがまんしなければならぬ。そこで、さいしょに、著者のいわゆる「ユーロピア社会学の構想を紹介し、次いで、「ヨーロッパと社会主義」という論文を中心として著者の所論を考察したい。

二

本書の著者G・デュヴォーをして、単にあれこれのユーロピア思想家の研究へではなく、ほかならぬユーロピア社会学という体系の構築へと駆りたてたものは何であろうか。それは、彼自身がさまざまな場所で語っているように、現代ヨーロッパの危機であったと思われる。この危機を彼は第一に、いままで後進国と見なされていたアジア・アフリカの諸民族の興起を前にしてのヨーロッパの弱体化という現象のなかに見ている。「アメリカと西欧とにとって、もつとも重大な危機を構成するものは、資本主義の内的矛盾であるよりも、むしろ後進国と見なされていた諸国が政治的に覚醒した、ということなのだ。」(六〇頁) ヨーロッパの内紛がこれら新しい民族勢力の出現に拍車をかけ、それがさらにヨーロッパの弱体化へとはね返ってくる。しかも第二にヨーロッパ内部においては、未来をめざす社会主義者(デュヴォーにとって、共産主義はいわゆる科学的社会主義であり、社会主義とは英労働党、仏社会党、西独社会民主党などのことである。ついでながら、彼の政治的立場は反共社会

民主主義のように思われる)は深刻なジレンマに陥っている。社会主義を標榜するからには、現状維持と歴史の停止を弁護することはできぬ。だが、ヨーロッパの変革のために一歩踏出すことも躊躇される。なぜなら、ヨーロッパの防波堤の後側では復讐を狙うナチズムが再現する危険があり、逆に、頽廢した資本主義を終熄せしむるためにソヴィエトの援助を乞うならば、自由ヨーロッパの吊鐘を鳴らすことになりかねない。またソヴィエトの脅威からヨーロッパを防衛しようとするれば、ドイツの方からあの不吉な長靴の音がひびいてくる。しかも、こうして躊躇しているあいだにヨーロッパはますます腐ってゆく(一八四―一八五頁)。つまりデュヴォーはフランス知識人の立場から現代の危機を、こうしたジレンマ(われわれから見れば抽象的一面的にすぎない)として受け取っているのだ。では、このジレンマから如何にして脱出するか。デュヴォーは、いささかの不安と躊躇を残しながらも、巨大な技術的進歩と、サンシモンやクルノーに起源をもつテクノクラシーの思想に期待をかける。ヨーロッパの危機とその打開の方向をこのように考えるデュヴォーは、危機を構成する現代の歴史的与件や、総じて歴史性をいかに超えるかという問題を、ほかならぬ社会学の問題として提起するのである。そこで彼は、歴史に対して人間の自由な意志と知性を対置し、歴史の発展のなかに必然的法則を発見する一元論的世界観とそれに基づく大衆運動に対して、世界についての多元論的な見方とエリートによる社会の組織化とを対置する。次いで彼は、ヨーロッ

バ思想史のなかに、この両者の恒常的な対立を発見し、この対立を軸として人間とその思惟との類型学を、一種の知識社会学として構築しようとするのである。これが彼のいわゆるユトピア社会学である。いうまでもなく、一元論的弁証法的歴史観はヘーゲルとマルクスの思想のなかに、合理的多元論的思惟は、啓蒙主義とユトピアの伝統のなかに求められる。当然のことながら力点は後者に向けられる。こうして彼は、ユトピア的思惟を中心としてのヨーロッパ思想史を企図しているのではなく、ユトピア的思惟を人間的思惟の一つの類型、しかも単なる類型としてではなく歴史を超えて恒常的に存在する一つの原型(archetype)としてとらえることによって、ユトピア社会学を構想するのである。したがって、さまざまな思想家が研究されるが、それは、その中に内在すべき研究対象としてよりも、むしろ彼の構想を実現するための材料として利用される、ということにならざるを得ない。

たとえば彼は、「ユトピア社会学序説」のなかで、ユトピア概念を形而上学的に定義すべきではなく、実証的に、つまり発生的に研究すべきであるとして、この概念の発達を四期に区分し、それぞれの時期についての研究課題を提示している。すなわち、(一) ユトピアの父トマス・モアにおいてユトピアは何をあらわしているか。(二) 一世紀中葉における、マルクスとエンゲルスとのいわゆる科学的社会主义とユトピア社会主义との対立の問題。(三) 二〇世紀初頭における、ジョルジュ・ソレルの神話とユトピアとの対立の問題。(四) カ

ル・マンハイムの提出したイデオロギーとユトピアの区別をいかに理解し、いかに利用すべきかという問題。しかし、この四期はユトピア概念の史的発展のエポックとして考えられているのでは決してない。この四つの時期に、ユトピアの基本的問題が提出されており、この四期にそれぞれ提出された問題を検討すれば、類型学的知識社会学としてのユトピア社会学に必要な概念装置を整えることができるかと判断されているにすぎないのである。事実、彼が歴史的に研究しているのだと称しているときも彼の研究は、われわれの理解する歴史研究とは似もつかぬものである。ここから、実証的ならざる、こっけいな独断が時としてあらわれる。たとえばトマス・モアは、大法官としての政治的経験から生じた失望の補償を、その『ユトピア』のなかに求めた、というが如き(『ユトピア』執筆は大法官の職につく一四年前のことであった)。あるいは、マルクス主義の社会決定論を攻撃するに急なあまり、リニューマチや氣質が、イギリスの困い込み運動や、フランス革命のジャコバン派とジロンド派の原理的対立と、少くとも同等の役割を歴史の中で果たすと主張するが如き。

ユトピア社会学の構想については、なお語るべきことが多いが、紙数が制限されているためすべて割愛するのほかはない。ただ、彼が積極的に主張し、自からもかなり負って書いてと思われる、ユトピストの心理学的、性格学的研究は、余り実り豊かなものでもなく有効なものでもないように思われた、という印象を記すにとどめる。

三

すでに述べたことから直ちに予想されるように、デュヴォー
 にも情熱的に論じているのは、ユトピア社会主義と科
 学的社会主義の問題であって、本書のすべての論文の核心をな
 す問題はまさしくここにある。そして、ヨーロッパ統一の理念
 を軸としながら、この問題を真正面から論じたのが「ヨーロッ
 パと社会主義」という論文である。これは、本書全体の三分の
 一を占めるかなり長大な論文であって、著者がもつとも力をこ
 めて書いたものであろうと想像されるし、デュヴォーのいわゆ
 るユトピア社会学の基本的テーマはほとんどすべてこの論文
 の中にあらわれている。ユトピア的人間類型とヘーゲル・マ
 ルクス主義的人間類型、ユトピア社会主義と科学的社会主義
 の対立を、ヨーロッパの未来像を中軸として論じることは、前
 節で述べたデュヴォーの危機意識や問題関心からして、まさし
 く打ってつけのテーマであつたであろう。このテーマを彼は、サ
 ンシモンおよびサンシモン主義者たちとブルードンの思想
 に力点をおき、その引立て役としてヘーゲルやマルクスの思想
 を対照させつつ、前者において見られる思惟構造の現代的有効
 性を論証することによって、ユトピアの現代における復興を
 主張しようとしているのである。できるかぎり著者の叙述に即
 しながら、この論文を要約してみよう。

1 デュヴォーは、一八世紀末から一九世紀前半にかけての
 統一ヨーロッパの理念に関連させて、啓蒙主義からユトピア

社会主義へと至る系譜を跡づける。ルソーはヨーロッパ共和国
 を夢想した。そしてルソーの精神によって鼓舞された大革命の
 あいだは、マティエースが指摘したように、*patriotes* という単
 語は *humanitaire* や *cosmopolite* と同義語であり、*aristo-*
crate には対立したが、*internationaliste* に対立するものでは
 なかった。封建的・カトリック的帝国に代るべき、理性に基
 づく西欧帝国が夢想された。たしかにそこには野心と攻撃的性質
 とが結びついていた。「歴史は経済学の用語で説明されると同
 様生物学の用語でも説明される。比較的賢明な王の下で力を蓄
 えていたフランスは、その血気を発散させる必要があつた」(一
 四一―二頁)。ナポレオンがこの夢想を実現しようとして挫折
 する。サンシモンがヨーロッパ再組織計画をねりあげる。そ
 してバルザックやユゴーの小説にも描かれているように、誕生
 しつづつあつた社会主義は、ヨーロッパ統一の選手たることを自
 任した。労働者出身の社会主義者コルボンが「ヨーロッパ連合
 という、この美しいユトピアは、それに反対するすべての人
 の意志にもかかわらず建設される」と叫んでいた。それから百
 年、統一ヨーロッパのヴィジョンについての社会主義の立場は
 すっかり変わってしまった。ヨーロッパ会議の創設にかかわるス
 パークやベヴァンやモレの不一致がそれを示している。

2 次いで、産業社会と労働者解放の問題についての、ユト
 ピア的伝統、とくにジャコバン派と社会主義との親近性が跡
 づけられる。一九世紀のイギリスとフランスに出現した産業社
 会は、残酷な不平等を作り出し、労働者に耐え難い貧困を強制

した。ところで労働者解放の武器として人々が使用した武器はブルジョワによって作られていたユトローピアであった。モアが三世紀を隔てて大きな影響を及ぼし、オーウェン、サンヒシモン、フリーエ、カペー等初期社会主義の理論家たちがあらわれる。彼らは人間の可塑性を信じる偉大な教育家でもあった。ところでフランスにおいては、ジャコビニズムと社会主義的ユトローピアの親近性をとくに強調せねばならぬ。モレリ、マブリ、ルソー、ロベスピエールの精神は、就中底辺の戦士たちの心において、初期社会主義に連続している。この伝統のうちから急進主義と社会主義というユトローピアの二つの道が出てくることになるが、両者は二月革命期にはほとんど混りあっており、ともに、社会は理性に基づいて建設されるべきだと考えていた。その後フランス社会主義は、社会主義インターナショナルの中で極めて独自の道を歩むのであるが、それは一方ではルソーや一七九三年の革命家たちの思想による影響と、他方ではユトローピアがヘーゲルとマルクスの攻撃を受けながら有効に反撃し得なかったという事情によって説明される。この複雑な態度に、ヨーロッパ統一のヴィジョンから照明を与えねばならない。「なぜならヨーロッパの問題は、まさしくユトローピアの枠の中に刻み込まれているからである。」(一三三頁)

3 合理的なもの (le rationnel) と歴史的なもの (le historique)、この二つがあらゆる時代を通じて見られる、思惟の根源的な方位である。ある時代には前者が勝ち、他の時代には後者が前者を打倒する。一六世紀初頭、歴史の人であるルーテ

ルが、理性とユトローピアの人たるエラスムスとモアに打ち勝った。フランス革命においても、「われわれの歴史はわれわれの法典ではない」というR・サンテティエヌのことばに象徴されるようにユトローピストであったジャコバン派が、経済的にはより進歩的なジロンド派を粉砕した。つまり理性が歴史を粉砕したのだ。だがそれ以後は形勢は逆転する。むしろこの矛盾した二つの方位が一人の人間のうちに共存することもあり得る。サンヒシモンがそうである。

ナポレオン帝国の崩壊後、歴史についてのマニ教的解釈があらわれ、正統派は大革命を悪とし正統王朝を善とし、頑固な自由主義者はその逆を主張するが、かかる常識的世論よりもはるかに高いところから、独創的で巨大な影響力をもったヘーゲルとサンヒシモンの二人の声がなりひびく。一九世紀前半における歴史とユトローピア、弁証法と理性の対立はこの二人の対立に代表され、後半期においてはマルクスとブルードンの対立として引きつがれる。

デュヴォーは、ヘーゲル哲学の核心をなすものとして、実現 (Erfüllung) と否定性の両概念を最大限に強調する。歴史はあらゆる人為を超えて自己を実現する。葛藤によって生じる残酷な帰結をすべて受入れ、それを黙って耐え忍ばねばならぬ。デュヴォーはこれをヘーゲルの汎悲劇主義 (pantragisme) と名づける。ヘーゲルの否定性の概念は、もともと奇怪な賤しい仕事を平然とやってのけるメイトル・ジャックである。弁証法の第三の契機たる止揚は、第二の契機、否定性の運動が大きい

ければ大きいほど豊饒となる。ヘーゲル哲学の体系の中では、もつとも暗い罪も歴史の名によって赦される。マルクスはこの両概念をうけつぎさらに発展させた。マルクスの歴史はヘーゲルのそれと同じリズムをもつ。こうして彼らにおいては、啓蒙の光と理性に代って、否定性の闇と宿命 (Fatum) の力が支配する。自覚すること、それは自己を主張し、目的を自由に選ぶことではなく、歴史の法則を発見し、涙と血にひたされた行為に参加することである。したがって、ユトーピストの企図する「統一ヨーロッパの管理がまさしく(人間と富の浪費に反対して) 経済を目標とする限り、理性という女神よりも歴史という女神の方を選ぶ人々の敵意に出会うであろう。」(一三九頁)

4 百科全書の合理的精神を受けついでいただけでなく、歴史の生成に対する鋭い感覚をも備えていたサンヒシモンは、青年期にはナポレオンにある期待をかけていた。ヘーゲルのように世界史の体現者を皇帝の中に見ただけではなく、無政府のヒドラの息の根をとめることによって旧制度への復讐を防いでくれるジャコバン派の兵士を彼のうちに、革命的イデオロギーと皇帝の力のお蔭で、ヨーロッパは政治的社会的に均質な統一体として再生し得るという希望を抱いていたからだ。だがこの期待はナポレオンの失脚によって裏切られる。一八一四年ブルボン王朝が復活した時、彼は自己自身のヨーロッパ統一の計画を、『ヨーロッパ社会の再組織について、あるいはヨーロッパ諸国民にその国民的独立を保持させつつ唯一の政治体に結合する必要とその手段について』という小冊子の形で発表した。

この計画にはすでに彼の合理主義的思惟と歴史的感觉とが緊密に結合されている。

青年期のサンヒシモンは、彼がめざす実証主義と矛盾する、歴史的原因論へと向う危険な傾向にひきずられたこともあった。神学的・封建的体制から形而上学的・法律的体制を通じて科学的・産業的体制へと歴史が進歩するという三段階のリズムがそうである。だが彼は成熟するにしたがい、歴史を实体化しようとする誘惑から解放される。彼は過去を裁くのにヘーゲル・マルクスの規準を採用せず、歴史のドラマツルギーを斥けて、道徳性、合理主義、技術的有効性の規準に従った。彼の思想においてはユトーピアへの志向と科学への志向、歴史把握の努力と義人の社会を建設しようとする努力とが幸福に結合していた。

ところでヘーゲルにあつては、精神はさいごには絶対に到達する。マルクスにあつては、プロレタリアートがすべての疎外から人間を解放し、キリスト教のメシアにも似たこのプロレタリアートの勝利が人間性の全面開花を約束する。この時人類の前途は終り、階級と階級闘争は消滅し、社会的に解放された人間の自然との闘いが開始される。こうして彼らにおいて最終段階では歴史が消滅する。つまり彼らの思想には、彼らが排除しようとしたユトーピアが、千福年説的クリマ、最後の審判のなかで甦っているのだ。それらはともに歴史の具体的認識にぞくするといふより、むしろ人間の原初的な夢にぞくする。サンヒシモンは反対に、歴史の真昼をめぐす。彼は悲劇的実現をでは

なく、勝利の成熟を求める。第二に、ヘーゲルとマルクスは失樂園の神話にとりつかれていた。疎外はその世俗的転写である。そしてこの失墜は、ヘーゲルでは悲劇の実現によって、マルクスでは階級闘争によって贖なされる。彼らは、晩年において『新キリスト教』を書いたサンシモンよりもよりキリスト教的であったと言い得る。サンシモンは言っている、われわれの背後には、われわれがそこから追われた黄金時代はないのだ、と。こうした対照的考察を行ってきたデューヴォーは、サンシモンの特徴を三点にまとめている。① 若きサンシモンは歴史を実体化しようとしたこともあったが、成熟するにしたがって、科学的合理化に力点を移すようになった。なぜなら、人間を啓蒙することが結局は運命に打ち勝つからだ。科学は彼に可能性を教え、ヘーゲルの受動性とジャコブンの破壊的な大胆さの中間にある王道を指示する。彼が造り出そうとする人間は、絶えず目を開けた見張番、典型的なゲーテの人間である。② 人間によって実現される進歩がどうであれ、人間は事件に対して若干の距離を置き、歴史の中に溺れず、常に緊張していなければならぬ、と彼は考える。彼はマルクスとちがって無階級社会の到来を信じない。ただ、科学が社会をより調和的にするのであろうし、知的解放が人間的抑圧に限界を与えるのであろうと信じる。彼の弟子たちは、八九年が宣言した平等は、社会的階層秩序を必然的に生み出す技術的進歩と衝突するだろうと予見していた。③ ここからサンシモン主義はますます宗教的な相貌を呈することになる。ヘーゲルとマルクスの世界

は単純化に向って進化する。サンシモン主義者の世界は反対に益々微妙で精緻な輪廓を帯び、日毎に複雑になる。この世界を把握し、この世界の富を形成する声の一つとして空息せしめぬためには、科学的綿密さと同時に全体的直観を必要とするのだ。この直観、この宗教的魂は、したがって、無数の声の対話をききとり識別することをめざす。こうしてサンシモン思想は多元論として性格づけられる。「近代ヨーロッパは多元論的哲学に包摂されてはじめて生き得るであろう。」(一五五頁)

5 サンシモンはいわゆるヨーロッパの均衡なるものを信じない。彼にとっては、力の均衡が問題ではなく、共通原理の全体によって鼓舞される親密な道德的結合こそが問題であったからだ。だから均衡理論を説くアベ・ド・サンピエールよりも、ヨーロッパの道德的統一を綱領にかかげる(ヘアンリ四世の大計画)を考案したシュリの方を評価したので。サンシモンは十字軍を讚美して「サラセン人のヨーロッパ征服の野望を挫く」という政治的目標によってなされた十字軍は、自由の敵に対する、完全な連合の戦であった」という。彼にとってヨーロッパは、利害の並列ではなく一つの共同体でなければならなかった。ところで未来の統一ヨーロッパの中心を構成するのは仏、英、独の三国である。「仏英同盟がドイツの参加によって拡大され、この三国に共通な議会在確立された時には、残余のヨーロッパの再組織は、急速かつ容易に行なわれるであらう」と彼は考えた。彼の弟子は、この三民族は人類進歩の三つの側面、道德、産業、科学を人格化したものだと思いつけ加える。一八

一四年のヨーロッパ再組織案のなかで、彼はヨーロッパ議會を構想し、ヨーロッパ連合の活動がな大きくなればなるほど、平和の維持は保証されると考え、「地球全体をヨーロッパのように旅行でき住むことができるようにすること、この事業を通してこそヨーロッパ議會はヨーロッパの活動をたえず促進し、緊張させるべきである」と書いている。サン・シモン主義はこのようにして民族問題を解決しつつ、ヨーロッパ統一を実現するための計画を提出したのであるが、民族問題を軽視し、すべてを階級闘争の図式の中に投げ込んでしまふ、わゆる科学的社會主義のために、その実現を阻止された。デュヴォーは、ヨーロッパの没落に対するマルクス主義の責任は重いと結論しつつ、現代史に言及してこう述べている。「歴史の目から見れば、第一次世界大戦は、本質的には中欧帝國に対する西欧民主主義の勝利を意味しない。それは就中西歐の没落と新ロシアの誕生とを意味する。一九三九年の第二次大戦においてヨーロッパはさらに弱体化する。弁証法の神々がユトローピアの技術家を雷撃したのだ。」(一七一―二頁)

与えられた紙数はすでにつきてしまった。二月革命におけるプロレタリアートの国際路線と小ブルジョワジーの保守的妥協の対立の問題、一九世紀後半におけるヨーロッパ統一のヴィジョンにかかわるブルードンとマルクスの対立、等々についての、デュヴォーの極めて興味深い観察はすべて割愛し、ユトローピア復興についての彼の結論だけを抄録することにする。「ヨーロッパのためにたたかう社會主義者は、その役割(受動的な)

を完全に変更するに適した切札を行使しようとする。すなわち世界の技術的進歩。われわれがそのリズムや強さを予見し得なかつた諸発見は、ますますわれわれの自覚を変えつつある。宇宙はますます流動的に、ますます柔順になってゆく。弁証法は、歴史の空において黄昏れつつある。スターリンは、弁証法を象徴したが故に、その台座から追放された。組織化が実現に打ち勝ち、意欲されたもの (le vain) が耐え忍ぶもの (le subi) に打ち勝とうとしているのだ。多元論がますます社会的行動を規定してゆくであろう。」(一八五―六頁)

四

こうして、ユトローピア社會学構築の企図は、その結論において、現代の危機におびえる不安な知識人の、反共ユトローピア宣言の絶叫に姿貌する。デュヴォーの社會学も、ボーヴォワールの言葉を借りれば、やはり敗北の星のもとに作りあげられた苦悶の叫びなのである。歴史の、現実の運動そのものを、ヘーゲル・マルクスの弁証法の歴史概念に解消させようとして、今度はあらためてヨーロッパの没落という無慈悲な歴史の責任を、マルクス主義の観念組織におしかおせるといふ二重の手法が彼の社會学の秘密なのである。こうして歴史の地平をきれいさっぱり掃き清めた真空の場所に、ユトローピアの亡霊を呼び出すことによつて、彼は彼としての補償の試みを行なっているのだ。それにしても、サン・シモンとともに、ヘーゲル・マルクスの歴史的ドラマツルギーをはげしく非難したデュヴォーが、何と見

事に観念的な歴史劇、思想史劇を演出してみせていることであろう。学問的実証性においても反動化してしまっているらしい彼の社会学の論理は、自己の論理の有効性を誇示しようとするればするほど、自己自身をきびしく断罪するというジレンマに陥っているのである。彼のただ一つの功績は、ユトーピア社会主義をそのヨーロッパの未来像に関連させて執拗に追及したこと

にあるように思われる。このことの意義については、私は、別の機会にくわしく論じたいと思っている。(紙数の制限のために註記はすべて割愛しなければならなかったことをお詫びしておく。)

(一橋大学大学院学生)